

令和5年度新規就農者育成事業研修成果報告書

研修生氏名： 伊藤 寛基

1 研修動機

私は農家出身ではなく、須賀川市出身でもない。元々は東京の大学院で農業系の研究をしていた。幼少の頃から見聞きする農業の話題と言えば、担い手の高齢化や耕作放棄地の拡大など暗い物ばかりであった。そのため農業分野の仕事に就き問題解決することを夢見ていたが、次第に自分が本当にしたいことは具体的に何なのか悩むようになった。

「自ら営農し農作業に従事するのではなく、研究を通じて国内農業の振興に貢献したらどうか」という意見は多々あったが、いろいろ考えた末就農を決意するに至った。手短かに理由を述べると、研究と実業は別物であり、農業の未来に希望を見出す方法は自ら営農しなければわからないと考えたからである。

そのためには、豊富な農業体験と知識が必須であり、私は経験不十分ながらも農業研修を容認していただける自治体を探した。就農地として、慣れ親しんだ出身地の宮城県に近い福島県を選んだ。初め電話をかけた自治体では新規就農者の募集を締め切っており、電話口の担当者から紹介されたのが、当時名前すら知らなかった須賀川市であった。作目としてきゅうりを選んだのは、大学時代実験植物としてきゅうりを栽培していた縁である。

2 研修生となって

(1) きゅうり栽培農家実務研修

4月中旬～12月上旬および翌年1月下旬～3月末まで、施設栽培(促成・抑制)と雨よけ栽培を行っている農家様のもとで研修を行った。

初めて圃場に入った日、収穫適期の果実はどれか、選果の際秀品かどうかの見分けが全くつかなかった。「子づるは第1節で摘芯する」という知識はあっても、そもそも子づると孫づるの区別がつかないので自信を持って摘芯することができなかった。何より、仕事の遂行速度が農家様と比較してはるかに遅かった。

そこでまず、目を慣らして果実の大きさや樹姿を感覚で捉えることを目標とした。日々通ううちに少しずつ理解が進み、秋にはハサミを当てて長さを計らなくても収穫適期の果実を見分けられるようになった。その間、整枝や消毒など新たな作業も体験した。

圃場の乾きが十分でないときは畝立てを延期するなど、栽培計画が順調に進展しない場合でも焦らず臨機応変に対応することの重要性を学んだ。極度に忙しい時期もあり、時には水稻の仕事を手伝うこともあった。

翌年の促成栽培では定植から収穫までの流れを復習することができた。この頃にはただ漠然と反収目標を掲げるのではなく、目標を達成するためには1株あたり何本収穫すべきか、そのためには定植後何日目ごろにどの節位に何個程度着花していることが理想的かということにまで意識が及ぶようになった。

(2) 農業関係機関研修

農業普及所主催のきゅうり基礎力アップ研修会を受講した。栽培を始めるにあたって、畝間や通路幅、定植間隔をどう設計するかなど教わった。他の施設栽培農家様の圃場訪問の機会もあり、灌水設備の設置手順などを質問させていただいた。このほか、農業機械の安全使用に関する研修、スマート農業研修、青色確定申告セミナーなど、栽培技術以外にも営農に役立つスキルを広く学ぶことができ有意義であった。

(3) 公社業務研修

農業公社では主として公園の整備、ニンニク圃場の管理および味噌づくりを経験した。一見きゅうりに無関係な業務だが、公園整備の際習得した刈払機や粉碎機の運転、ニンニク畑で習得した管理機の運転は、後日自らの圃場を整備する際に大いに役立った。

3 研修を終えて

実のところ研修を始めるまで、自分は本当に農業が好きか、何があっても続ける覚悟があるか不確かだった。一年間の研修を経て、農家様はじめ関係者の皆様に支えられ、以前にもまして「農業は面白い、ぜひ続けたい」と思えるようになった。

きゅうりは工業製品ではないため生育状況に個体差が生じる。研修での学びをもとに、生育状況に応じた栽培管理を身につけることが次なる課題である。

4 就農展望

1年目は遅まきの雨よけ栽培、2年目以降は促成栽培および雨よけ栽培の二作行う予定である。二作合わせて30トンどりが現時点の目標だ。5年以内に実現したいが、実力は急激につかない。計画を立て、焦らず栽培技術を確立することを第一方針としたい。